

障害理解教育の授業を通じた 中学生の思考の変容

—M-GTA を用いた授業終了後の感想文の分析から—

○平沼源志 藤井梓 富永光昭
 (大阪体育大学教育学部) (子ども発達スクールかすたねっと) (大阪教育大学)
 KEYWORDS: 障害理解教育 交流及び共同学習 思考の変容

(目的)

障害理解教育では、障害疑似体験が重視される傾向にあること(今枝ら, 2013)や、体験活動のみでは子どもの障害に関する認識や理解が深まらないという課題も指摘されている(徳田・水野, 2005, 他)。また、今なお障害のある人に対する一方向的な支援を目的とした授業が行なわれていることから、障害理解教育では障害のない子どもと障害のある子どもの双方向的な関係を基軸に据えた授業において、体験活動に終始することなく、障害のない子どもの障害に関する認識や理解を深めていく必要がある。しかし、このような観点を踏まえた障害理解教育の授業実践に関する報告(水野, 2016)や、授業を受けた子どもの障害に関する認識や理解を検討した研究は散見される程度である。

そこで本研究では、これまでの諸課題を踏まえて提唱されている、富永(2011)の原則に基づく障害理解教育の授業を受けた、中学生の障害に関する思考の変容過程を明らかにすることを目的とした。

(方法)

(1) 障害理解教育の授業概要

201X年、A大学・B中学校・C特別支援学校が連携し、交流及び共同学習と事前学習としての障害理解教育の授業を実施した。障害理解教育の授業はA大学がB中学校に対して実施し、富永(2011)の原則に基づき、①障害を自分たちの問題として捉える、②障害を社会的問題として捉える、③障害を肯定的側面から捉えるという単元目標を設定した。授業は全4次から成り、本研究では第3次の授業を分析対象とした。第3次の授業では、視覚障害を取り上げ、視覚障害のある人ができることに注目し、視覚以外の感覚器官を活用する意義やユニバーサル・デザインの考え方について理解させようとした。また、個人用アイマスクを作成し、体験活動を通してこの捉え方を生徒自身で確かめさせようとした。

(2) 分析対象と手続き

調査対象は、B中学校1年生で、欠席者を除く3クラス計110人であり、本授業を受けた感想について自由記述で回答を得た。実施日は201X年9月X日であった。

(3) 分析方法

分析方法は、木下(2003)のM-GTAを用いた。M-GTAは「研究対象とする現象がプロセス的性格をもって」(p.90)おり、それが「特定の目的的文脈で関係付けられている」(p.90)社会的相互作用の場における現象に対し、独自の研究テーマを設定し検討する研究に適している。また、本研究の結果は実践現場に還元していくという応用可能性を重視することからも、M-GTAが本研究の分析方法として適切であると考えた。

(結果と考察)

分析の結果、生徒の思考については、9の概念と4のカテゴリーに集約され、概念間の関連を表した結果図(図1)から、本授業を受けた生徒の思考の変容過程は、①視覚障害に関する具体的認識の獲得、②障害に関する認識の捉え直し、③実践に向けた思考の3段階に特徴づけられた。

①視覚障害に関する具体的認識の獲得

生徒は授業のはじめに視覚障害の種類や状態に関する具体的な認識を得たり、自分自身の視覚を意識したりすることで、視覚障害と自分の関連性を捉えていくことになった。また、

アイマスク体験では視覚障害のある人が視覚以外の感覚器官を敏感に活用していることを認識した。しかし、体験活動では、徳田(2005)が指摘するように、障害のある人に対して否定的な印象を持つ生徒が多くいた。

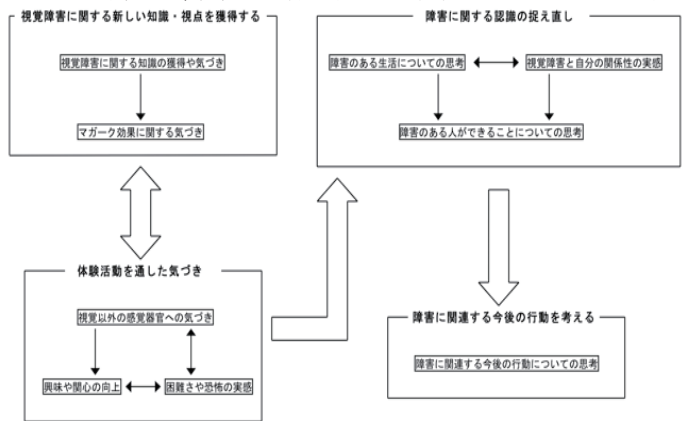
②障害に関する認識の捉え直し

生徒は視覚障害に関する具体的な認識を得たうえで、体験活動による視覚以外の感覚器官への気づきから、視覚障害のある人と自分の関連性を捉えるようになった。また、視覚障害のある人の生活について考え、視覚障害のある人ができることに着目するようになった。さらに、障害のある状態と障害のない状態の違いやその連続性について考えることが、障害と自分の関連性を捉える行為を促したと推察される。

③実践に向けた思考

生徒は視覚障害に関する具体的な認識を獲得し、自分の障害に関する認識を捉え直すことを通じて、障害のある人に対する今後の自分の行動について具体的に考えるようになった。この思考に至る要因として、障害理解教育の授業の後に交流及び共同学習の場が設定されていることが挙げられる。これらの取り組みが関連づけられていることにより、障害理解教育の授業において、生徒が障害のある人との関わりを現実的に考える契機になるとともに、障害に関する認識を深めていく動機にもなると考えられる。

図1 障害理解教育の授業を受けた中学生の思考の変容過程



(主要文献)

今枝史雄・楠敬太・金森裕治(2013) 通常の小・中学校における障害理解教育の実態に関する研究(第I報)-実践状況及び教員の意識に関する調査を通して-. 大阪教育大学研究紀要 第四部門 教育科学, 61(2), 63-76.
 徳田克己・水野智美編著(2005) 障害理解-心のバリアフリーの理論と実践-. 誠信書房, 2-9.
 水野智美(2016) はじめよう! 障害理解教育-子どもの発達段階に沿った指導計画と授業例-. 図書文化
 富永光昭(2011) 小学校・中学校・高等学校における新しい障がい理解教育の創造-交流及び共同学習・福祉教育との関連と5原則による授業づくり-. 福村出版, 7-18, 25-80.
 木下康仁(2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践-質的研究への誘い-. 弘文社, 89-91. 他
 (HIRANUMA Motoshi, FUJI Azusa, TOMINAGA Mitsuaki)